



和氣清磨
一代記

本朝錦繡談圖會

三

~13
3941
3



門 813
號 3941
卷 3

本朝錦繡談首會卷三



洛

東籬亭主人補編

奉獻吉使宇佐神

大正十年八月九日寄
本大學出版部贈

平城法華寺の皇居の文武の諸卿日々参勤。軍戦の勝負を
俟とて入慶の官軍十二分の勝利を得。押勝滅亡の注進を聞
面々胸を易と覺ゆ。吉備真備卿已下官軍の諸將押勝を首級三
十四人の生虜を引りぬ。軍の次第を奏し奉る。上皇盛感す
まはし。諸將厚く勞ひ軍功の高下をわたり。官禄加級を授と
まひ。就中吉備卿の軍略を称し大納言。押勝を首と梟木を
つ。荷擔の逆目塩焼王を始め三十四人を死刑せりぬ。尚も余黨
をてて。誅戮せんことを命じりぬ。大法尼法均をかく上皇を申

大月錦繡談卷三

省々。終小三百七十五人と助命。流刑小處せしめしむる。是
と聞。流刑の輩法均の慈惠と感佩。和氣氏の妙身洪福と祈
らぬもの無き。將又先年押撈が諺ふより。坑紫小左辻せしむる
豊成公と召返さ。敢官元のしく右大臣小復し。斯くのら更
兵部卿和氣王。左兵衛督山村王外衛大将百濟王敬福小官軍
數百騎と授て。新帝の坐す中官院と轉と囲ませり。皇
皇居参仕の人々大驚。防禦を逆臣とやふんと曰。向。逃匿
新帝も速の事。衣冠と繕ふ間。和氣王以下推参。上皇
の宣命と演へ直小帝位を下。奉。原の大炊王。右衛門督蔵
下麻呂奉行。怪異の事。衆をまつ。淡路の國高松に移。す
よ。淡路の廢帝と申奉。後日無冤と。か。鳴身と。な。せ。ふ

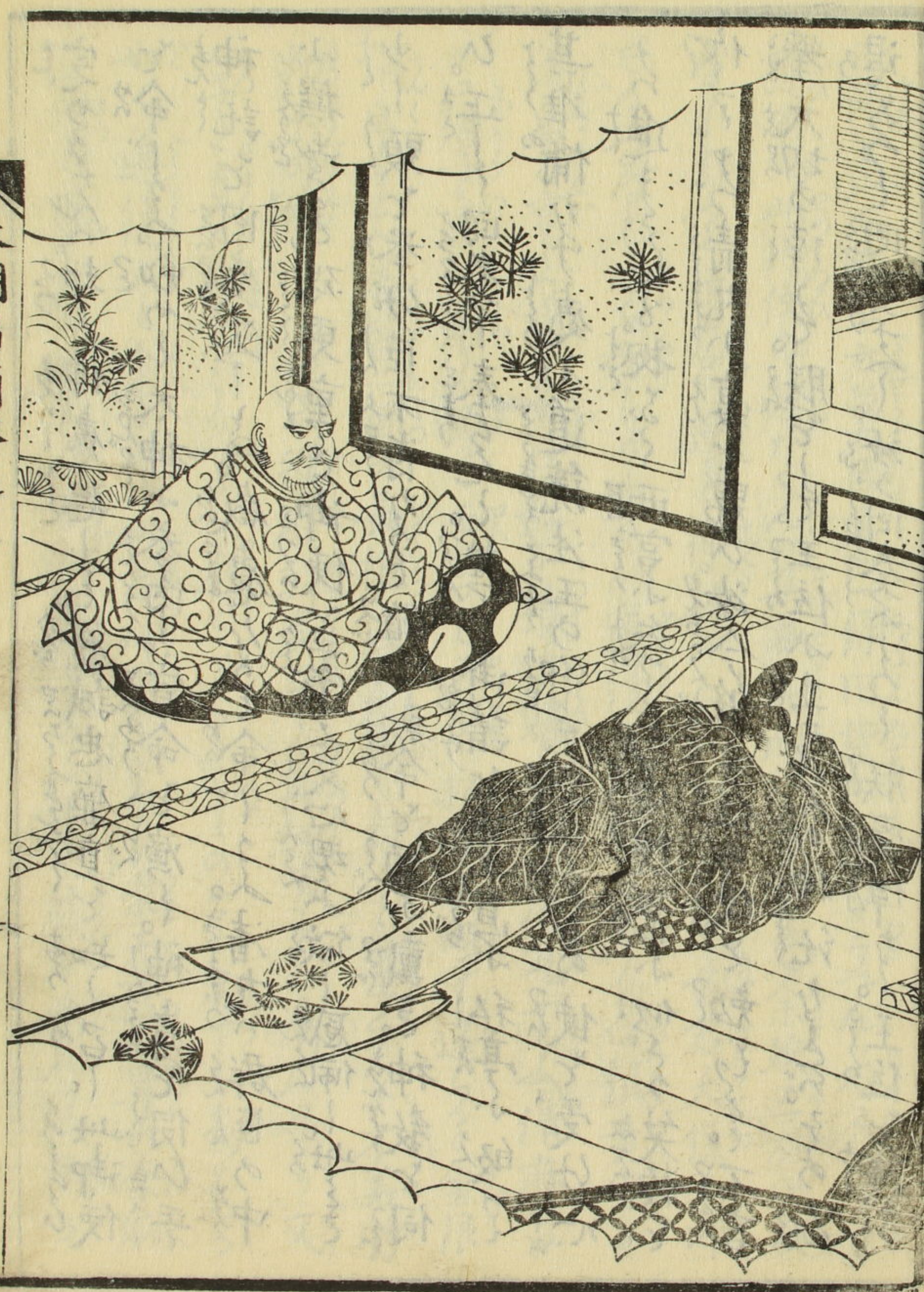
と憤。密小御隠謀と企。夜小修。配所志のし出志。武
士と語令。國司大。不日探。再。原の盧
。奉。都。新帝と廢。上皇保良の都。於
。重祚の式礼。再。天位と踐。稱徳天皇と尊号
。手号と天平神護元年と改。去。削道鏡。大膽不
敵の質。流石軍。聞度々。恐怖。を
深官小潜。居。寐食更。安。漸。朝敵。び。のら。ん。
又。驕慢。甚。無頼。已。敢。竊。小。内。奏。な。せ。る。道。鏡
と。以。太。政。大。臣。と。吉。備。真。備。公。左。大。目。と。藤。原。永。手。公。を。右。大
臣。と。是。ハ。右。大。臣。豊。成。公。一。度。君。惠。の。辱。と。右。府。小。復。し。る。人。と。

押勝が罪と恐るる人。大臣と辞退りしふより。道鏡の三公の上
 居る。弥我慢増長し。公卿と見し事塵芥なるも。輕し。刺へ翌
 年。法王位となりし。西宮と曰う寐殿し。富貴榮耀心のすまふ。
 尚まことと足つとせ守。已ま王位を踐む。四海を握る人の望をす。
 吉倫大臣の原より。文武兼備の明君と。異朝もふ褒て遺す。
 博學多才のすまふ。道鏡が奸智の察し。其時のつとむと
 識る。何夏も。宰のす。渠が隨意の垂る。道鏡の大目の
 明智と恐る。奸謀の色も出ず。密ふを計謀をめぐりし。ゆり。
 天平神護三年六月。都の東南にあらる。五色の雲變變と
 了。公卿以下その吉凶を判断する折る。伊勢国司阿倍朝臣東人
 注進す。伊勢豊氣大神宮の上にあらる。五色の瑞雲あらる。

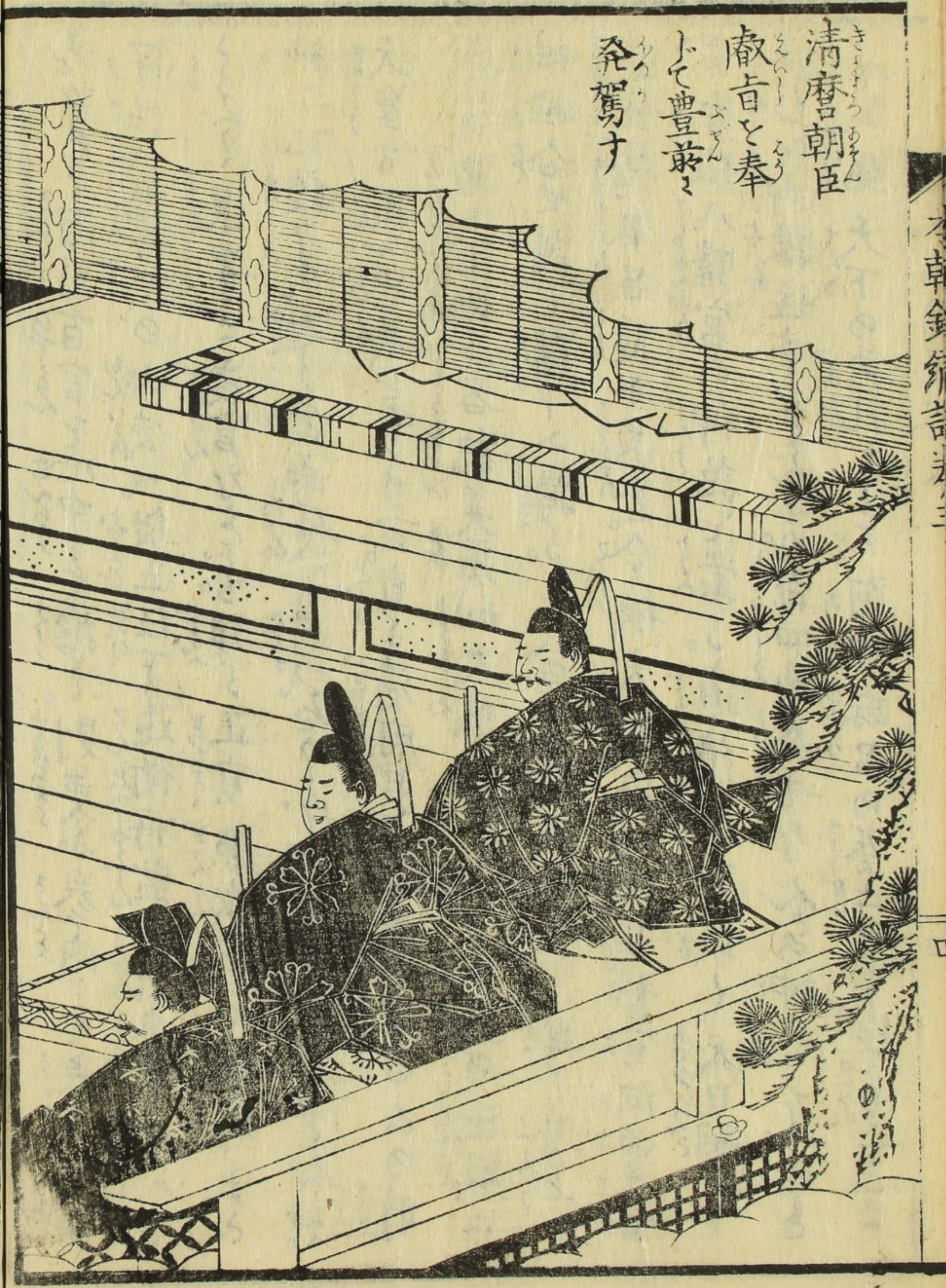
する画首。天す。陰陽寮の仰を。吉凶を考ふる。あ
 ち至極の瑞雲とす。天下泰平の兆なり。奏す。奏す。
 小。年号改元あり。神護景雲と号す。大小宴を設け。公
 卿百司。被物を賜ふ。筑紫太宰府の神官。習直阿曾麻
 呂とす。都の上。奏す。曰。某過夜。宇佐八幡宮の託
 宣を蒙る。其の意。今上小親近。道鏡の。頗る佛法の深味と
 極る。速小渠。王位を禪す。天下の政を任る。益四海
 安徳。國家幸甚。著る神告を得る。故。長途を
 馳登つて奏す。演。公卿の互。面と見合。嚴惠の程を
 計る。左方の倚子。道鏡法王満面。小悦喜とありし。
 賢る。神明。道鏡が法徳を照覽あり。殊。小四海益安平あり。

人の神託。天皇いづる背きあらん。汝天下の為を以て。遂に上都
奏上するも。真誠忠の至なるを。詔せ給へ。阿曾上呂を褒賞す。天皇
も道鏡を寵愛し。言の隨意に免るる人。王位讓禪に天下
の典儀を。私小計ひ給へ。先阿曾九を退けしめ
更ふ左大臣真備公を召ま。神託賢く。疑ふつら。あはれ
讓位の事。最し大切。唯阿曾上呂の上奏を以て。輕る
しく計らへ。却て神慮を恐るる。更小宇佐へ御使を
今一回神慮を伺ひ。しる神託并合なる。道鏡法王受禪
の事。然し。此御使を勅しつる者と。汝推し奉る。その
家も。吉備公の深き睿慮を感嘆し。退く。借考へ。天下
の安危の一変小あはれ。智勇を兼り。忠臣なり。必大吏と為

を。と。百司百官と心中と。擡て。則更小参内して。夫天の
宇佐八幡宮への御使へ。從五位下。迎衛將監和氣真人清麻呂
を遣はし。渠つら。淺官なまも。願ふ。正直廉潔。誠忠。ま
他。比類を。恐る。御使と過つる。謹んで奏し。人
天皇も。渠が忠義を。清麻呂と。清麻呂去の時
三十五歳。天の作。容貌美茂。加之威あり。武。緋の
袖。檢合。謹んで。階下。左大臣吉備公玉座。一揖。階上
進出。清麻呂。慥小美。今般。太宰府の神官。習宜阿曾麻
呂。宇佐八幡宮の神託を蒙る。道鏡法王を以て。天日嗣
王位を御讓位す。益四海泰平なる。神告なり。然
も。此儀。天下の典儀。阿曾麻呂の奏上。を以て。是



清曆朝臣
 敵旨と奉
 卜て豊前
 弁駕す



定つる人へ却て神慮恐し。汝誠忠廉直を知し。此御使
 と命し。人勅め。太神小参内。宣命と演。神慮を伺ひ。兵
 神託と同奏す。その。威慮なり。命し。清丸の群臣の中
 小撰せ。殊更重と御使と家。支心魂小徹し。感佩し。此
 少一頭と挙げ臣不肖なり。雖も。勅命と頭小戴き。神教と伺
 ひ。正しく回奏し奉らん。謹く御請と申上。直不私亭小飯。心
 其準備なり。處之道鏡法王の仰も。急参す。まの使と受け。心
 進ま。松ふ。西宮小参。道鏡常小似。笑顔と
 作。清丸小宴と賜ひ。汝今般宇佐の使と勉む。不言
 舉大切の諄も。朕として。王位小立。あんの神託なり。その心
 得め。同奏す。汝も同奏す。朕受禪なり。王位と踐ふ

汝と以て。直不太政大臣と。祿田望の国を与ん。若入得意
 達也。此御使の詮なく。其身死刑の原なり。余殃三旗小及
 ぶ。清丸謹く神託小。必君天位。即
 心と。道鏡大歡喜なり。白銀黄金
 編帛等。目積せ。清丸。清麻呂
 厚意と謝。頭を西宮と。私亭小。送ら。金浪
 編帛まで。悉皆一箇の長櫃と納め。固く封。墨。不義聘
 物不可納。徒者許多卒。奔向す。清丸。文
 厚き真人豊永と。人遠く送。別。足下も。魚
 如く。道鏡。余。若神教。渠天位小昇。余
 と。臣と。道。不如首陽の山下。蔽を。卿

心如何。清麻呂曰。日光天。大明。故之。豊永清麻呂を拜く。卿が誠忠かく有へ。今何を患へんと決とく。

回奏神託為諳客

和氣清麻呂私者を怒る。漸く宇佐に着て神官と宿し。七日の間。突奇沐浴し。衣幹と清浄して朝服と嚴く。謹で神前。小額突申形。従五位下和氣真八清麻呂賢くも。勅を奉り。神慮とくがひ奉る。晨時。小習宜阿曾麻呂を奏する。神託の趣。昔へえより天下の重式とて更と。輕なる處なき。後今一般。臣とて。神慮と伺る。仰願ふ。清麻呂。小。神異を示り。後。託宣の空しく。教えり。神扉自く。禱言。奉る。不思儀や。神殿鳴動。神扉自く。

開く。金光赫々として。その長三丈余の日輪。小陽火。焰と立上る。清麻呂。神威と恐る。再い。神託と出。神扉自く。託宣と傳ふ。何処より。十二三の巫女。速くと趨くと出。神扉自く。正身突立。清麻呂。謹く奉る。我國宗。開辟より。以來。君臣多定。臣と以て。君と為る。天日嗣へ。必皇緒と立る。無道の者。と迅く掃蕩す。汝言と詭と。直言と以て。奏すと。高聲と。託と。巫女の。破と倒る。清麻呂。正し。神託と蒙る。感激の流涙袖と濡し。謹く。臣。清麻呂。小。神託と辱す。命と誓ひて。私意と交つ。明白。小。回奏。奉る。其の宝祚長遠。四海太平。なる。率を。精心と。禱す。此時。神扉自く。小。神扉自く。倒伏。巫子も。

正氣小復す。清麻呂の重々の奇瑞を得る。急速故路を促し。
 夜を日小継ぐ都小着し。私亭も立寄ると旅の事も直小宮中
 小入る執奏口を。清麻呂啟着と叡聞あり。御帳臺より出御
 せり。吉備公以下公卿百官左右小列坐し正笏あり。道傍に
 殊小錦繡を着し。高々小警蹕を唱せ。玉座の右方小倚子
 と立を。寛々と身を倚ぐ。迅く受禪の形容も。下知つて
 清麻呂と召す。清麻呂階下小進し。玉座小向ひ拜と做し。
 階下小蹲き頭を挙げ。臣清麻呂。勅を奉る。宇佐八幡宮
 小奉幣し。勅宣と漁べ護る。神慮を伺ひ奉る。小神慮處
 鳴動し。神扉自ら小開くと等し。金光赫々として。二天余の
 日輪陽火々々として昇る。臣その神威を恐る。階下平身す。

知小。十二三ごろあり。巫女何方より趨き出神前ふけり。立
 清麻呂謹々奉る。我國宗廟辟より以來。君臣分定る。臣と
 りつ。君と為る。未あらず。天日嗣の必皇緒と立る。無道の者を迅
 く掃蕩す。汝言を詭つ。真言をりつ。奏す。高き託
 した。巫女の撰地と倒る。此時神扉自ら小開す。伏る巫女
 も生を得る。其後何の事なく。原より神託と飭言へ。況や
 神の戒や。明白小奏し奉る。高き奏す。叡慮へ。小
 身く。何の勅宣も。入御し。公卿以下列坐の諸卿。賞す
 身の毛も。誰の一言も。出けり。堂上堂下寂々。道
 鏡も同奏と。閉り。面色赤くなり。又青く変る。世とき忽眼血
 が。清麻呂と。礫と白眼。弥退清麻呂。汝不言哉。神託し。二ツ

か。先日小阿曾麻呂が美大りして今又汝が申せりと。表裏雲泥
の神託の何支。殊小道鏡と奥道と果し。迅く掃蕩すべし
と。己出の道鏡を惡し。神告小純。君と詭を奈奇怪千万。
るるく神罰その身小迫。瞬ら小及小貫。九族も死耻す。
敬ふ罵も。動々。殿上と踏あ。おろを蹴。深宮
小入。真小奏。清麻呂を。磔刑。慶しこと。天皇
尊く。清麻呂姉弟の誠忠。見聞。神慮の
と。怨。又道鏡が憤。流石小桑。大臣小命。
遠島小渡。道鏡へ心。足。倫言。背。き。す。
人怒止。清麻呂を。穢麻呂と改名。左右の足。取。
截。壁。大隅の國へ流す。命。庭上と引出。門外。

張真小。且。終言固の武士。密意を告げ。真小都と追出。
し。且清麻呂姉法均。同罪。還俗せし。廣虫と狹
虫。同日備前の國小流刑。清麻呂へ始。君小命と
捧。一言。言を解。世も怨。人。過。神と君の
哀愍。死刑。一等。免。却。心中。感佩。時。是。神
護景雲三年九月廿五日。嗟嘆。純忠の御身。無冤の罪名
と家。是。非。時代の形容。見聞の百官。怪の
民間。匹婦。袖と絞。中。真人。豊永。蜜。
吉備公。謁。道鏡。憤怒の躰。寧子。止。か。
願。助命の告文。賜。吉備公。之。察。其人。搦。小
折。節。急。筆。執。清麻呂を害。者。忽。死刑。

以て。余歿三族ふ乃ぐ今と墨ぐらふ祀く典ぐの豊永ふとをく
 戴き。飛馬ふ兼らう後と追ふ。清麻呂追立の官人等。歩平と
 嚴く追立。和只河内の通路なる生駒山の半腹ふ至り。爵樹の
 中。休足し。道鏡が空音ふり。此處にて清麻呂を害せんと白刃と
 匿拿。張典ふ貫んとす。処ふ一群の雲日光を蔽ひ。忽黑暗と
 なる。雷光切ふ輝とわら。雷電頭上ふ墮とす。太刀取從卒等六
 小恐怖。大地ふ俯伏し。頭と拍へ口ふ神佛の号と唱て冥助り。
 呼ぶ打柄。真人豊永後馳ふ駈けり。此体とる。倒る。警衛の
 官人と呼きて吉備公の告文と讀上ま。雖命危。雷電の不測なる
 小。心魂身と離る。頗る恐縮の期と。明智名譽の左
 府の命令つら。否々奉ふと。謹く承諾し。害ふるま。さう

誓とかり。今て茶と乱。雨し一陣の風ふ。雲次。日光原
 のぶく。晃々。豊永の清麻呂安否。典中を覗いた。ん
 うの震動。雷電も知。真中。脊と寄。睡眠せ。豊永
 と見。不審。是。意外。足下。是所。來。珠
 喜悦の顔色。豊永。寄。辞と正。足下。神託と直言。已
 へ。天下。國家の為。誠忠。古今。比類。今。万民。寢食。を休
 す。全。足下。の忠。勇。然。上。隔。つ。雲。あ。田。忠
 信。も。空。却。遠。近。哭。あ。去。余。う
 至。云々の命。後。逐。か。天。變。足下。あ。睡眠。あ
 ち。神。明。の。正。守。護。あ。處。最。尊。も。不。測。な。れ。今。を
 以。後。と。量。不。日。の。再。會。の。期。あ。心。剛。は。候。人。清。麻。呂

も心中小思合する支や有る珠小顔色和順く吉備公あひ豊永
 が厚志と謝し。鳳関の安泰と願ひ互後會と契り合豊永も
 都ふ引致す。警言固の武士左府の命將と重なる不測不恐も
 君は侍も親小保護浪花の浦より船出ると豊前国近くなれば
 清麻呂警言固の武士つつ。過日膽駒山雷鳴ありしとき。余
 昔らと睡眠萌し。暴雨風此もあらず刺さる誰ともあらず耳根
 まで。宇佐へ参ると告ると等しく。真人豊永と相遇り願く道と
 曲く八幡宮詣り。心を許さんや否や警言固の草犬と殺ひしれ
 我も願ふとすると則豊前の国宇佐郡塔田村今法の村名なり在
 村船入江なると所ありんば塔田村の和同後の迎と和氣
 野猪數百群と居り道の左右を連り。官人等大に驚き追を

退す叱までも動ず。及く二十余足張典の筋小頭となり人番と
 連糸宛も置と敷ると如く為り警言士大に恐も。この大神の
 納受なり。道と塞と入りんと種々の評判する。清戸召いた
 右と願く。余野猪の所為とんふ全神明の加護して汝寺り
 方を助り。試ふまが此書と野猪の脊上居あきんと。昇丁を
 恐く。命を乗すると等しく。かきと等しく勤とす。余の野
 猪も左右を列り。その形教言不異なり。警言固の官人縦卒等
 神明加護の不測と恐も。戦栗後小ゆる共の濱より十余里の
 行程左右を列り野猪の五七足が所々へ入交り次月と代
 り。看々人の所作が。止しと支の不測を。警言士等も足
 の進とあらず半日を。社頭を止す。野猪等と止し動を。

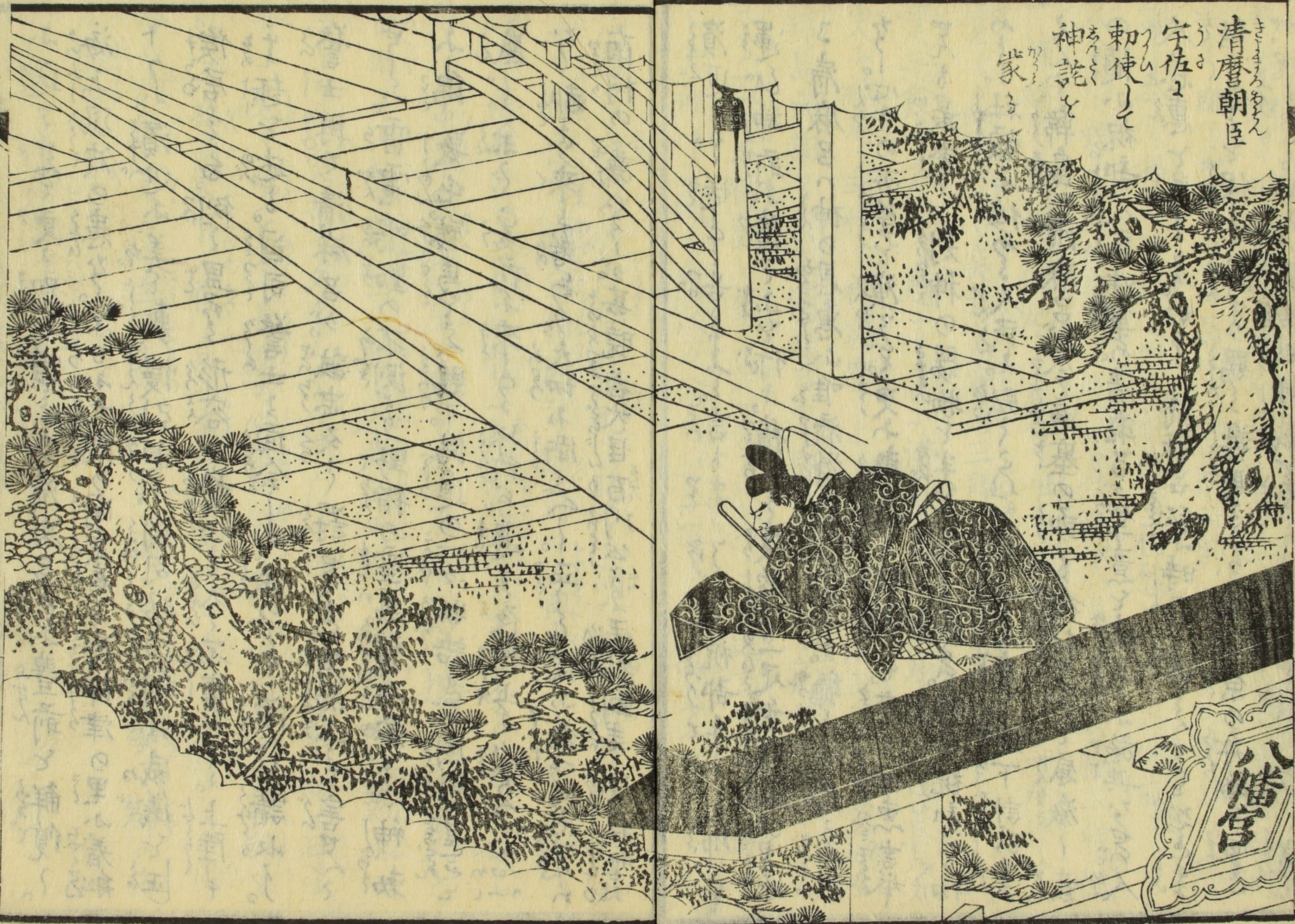
大洞島請水長三

上

警言卒進ぐ囚徒と下野猪一舟山中へ駆入る。清麻呂囚
 夷より彌と出警言士ホノ居抱て神前小蹲踞再生の神恩と拜
 謝し奉る。猶宝祚長遠奸臣解除の祈願と番ふ神前より
 尺余の小蛇ニツ左曲右曲と走る。清麻呂が左右の脚ふ纏附
 一締縮く忽ち何地より蔵る。世々精神爽々。氣力正しく
 覺し。何心なく突起。賽の三拜ふ。警言士もつるより大に後。
 壁平愈し。感ずる色ふ清麻呂へ。初く身体自由と見え。
 更小社前平伏。神託空しく。想く流涕止る。神司
 韓島氏趨き。清麻呂一別の懇情。每寛の遠駕と。言
 只今不測。神勅と蒙る。足下今社参り。託言直奏の貴く
 神庫小納綿八万余屯と。又と飯路小鞍馬と。

濱迎まが送ると告ると。言もまが。祝部手より綿を
 運び。神前小積を山と作す。積り。後駿馬一足乘鞍装ひ曳来
 る。清麻呂の神の恩恵。唯流涕の外。鶺鴒神前。再拜
 する。心中の所望を演る。更小韓島々。礼謝と重く。神惠言奉
 る。見も最賢。則神の賜物を半を多し。神司祝部を初
 め。社領小任める。人民。弘く。施与。足下計ひ。意
 らんや。韓島。清麻呂。今。逼塞の節。猶私なき。感激。意
 の。隨。祝部。人民。呼集。清麻呂。厚意。と。述。夫。小。施。其。人
 人。慈。惠。と。尊。清。麻。呂。私。時。日。と。送。ん。思。を
 飲。ん。を。促。と。神。より。賜。鞍。馬。より。騎。原。の。舟。路。小。向。と
 祝。部。を。民。百。姓。神。威。と。清。麻。呂。と。敬。と。濱。迎

清麿朝臣
宇佐
勅使
神託
蒙



八幡宮

小送りも更別を惜まら。清麻呂己小豊前と解領し。海上風波の患なき。不日大隅の国東原の郡仲津の里小着船し。濱辺小美敷敷引廻し。国司佐伯朝臣威儀を正し。俟居る。例し思ふ。形容し。警士大不審なり。上陸し。生趣と迷ふ。国司警士と面会し。法の。流人と請收り。警士再々清麻呂が誠忠及々討せし。生駒山と害せんとす。雷電鳴動の不測より。野指の雲異變平愈。神勅。小綿敷化駿馬を賜し。路道の。物語を。国司も其こと感ず。余く爰所不來を以祈し。過る夜枕上人あり。都より來る者あり。大切の衛士。正しく国小益ごと。南柯の夢なき。其曉右大臣百川公より飛札到美忠臣和氣

清麻呂故あつ其国より流刑に。間なく思免あつ。去ら。渠を國小田間余領國なる倫前の上田半と。清麻呂の衣食の普小充必等閑と。清麻呂が。中津の里小一室と建。清麻呂の。前馳し。かの新室。請入老若兩個の奴隷を附。薪水の。勞と。物不欠。清麻呂の。等小悉く綿と与へ長途の心勞と。謝し。百川公への謝辞を託。警言固の官人怪し。士卒も今更袂を濡し。程なく。洛の御使小又と。至り奉。異口同音再会と契。都の方小磁石と。

句引 美女配河伯

再説和氣清麻呂ハ警衛の輩と洛カ登セ諸吏整へてのら
 神授の綿を国司小贈とて餘残を以て近隣の者ヲ施与せん。
 左とても母比の誠忠も及く御身の怨とて罪なきと嶋守と
 なせり煩く殊更八幡大神の守護まう君と我り余處
 小見人の賢し。渙者ハ約得る鮮魚と僧の農丈ハ作も野菜
 と持運び日々小神饌と供ぐ。衣服調度の國司ハ神の
 故此も是らる處なり。朝ハ先帝都を拜し宝祚長久と布
 次小大神の恩惠と。拜謝しあま。一日も怠りず起臥常く
 正しくし。流石ハ通く波濤と隔てあま。近土の憂住
 唐文ハ都の心なり。容貌は憔悴し。兩個ハ奴隷
 も老實とて日夜忠しく仕へ。終中老僕摺積と異し。

常不銀不厨めて君都と名せり。歩履ハ侍とて。改り
 道鏡とて。母道の法師雲丹を犯し。乱日る時ハ都
 其の憂を避る。山野ハ心を放らざる。賤ハ芦屋より。月
 も。終く日出度澄昇る。日影さる。市使あり。花洛の春
 飯らむ。長閑と四方の花と。市運もゆる。采とんと
 と。心も愛朝暮の伎ゆり。笑話も。人々ハ道とて。事
 小私りあむ。五米の屋守が。聖語と引く。実や一家
 仁也。一國仁也。一家諫也。一國諫也。金言を傳
 の漁者農夫も自然とて。語らむ。匹夫匹婦も。夜も。五人七

人集ひ來り。多善言と聴聞せしむ。日と経手ふ多人數あり。
 宛も學院のてく群あり。清麻呂も殊に喜悅し。此も教く
 俸より。石子く戒め。怨ふ亦日。一文不通の輩。深くくを速激
 せし。自他互に。勅め。上と致し。下を怖る。孝貞忠信の道。し。
 ち。為物争ひなく。公支訖。詔も稀となれ。國司も大に。
 國益あり。告を感佩し。弥清麻呂とぞ。致し。一國の人
 民。聖人と尊称せり。かく。其年。早晩。景雲三年。秋の
 頃。雨降。つ。旬を超へ。暗間。え。霖雨。縮積。空
 しく。あ。ま。今日。暗。嗟嘆。天人。を。轉。と。清
 麻呂。を。閔。異。言。の。何。所以。人。と。害
 するや。縮積。君。知。古。の。法式。

かく。雨。日。數。経。河。伯。を。率。あ。中。津。川。
 伯。の。縣。内の。貴。賤。ふ。美。貌。少。女。と。數。千。貫。の。鵝。目。り。
 贖。い。を。河。伯。の。嫁。と。称。し。河。開。つ。然。只。の。崇
 として。水。漲。人。民。漂。溺。中。屋。子。數。貫。の。錢。を。出。す。故。ふ。美。女。の。人。を。賤。を。哭。し。又
 自。民。に。俾。役。を。怖。他。國。者。寡。く。す。我。を。嘆。く。
 天。人。と。害。を。申。す。清。麻。呂。九。古。代。の。生。贖
 を。求。り。神。の。禍。神。を。直。日。の。神。の。つ。て。人。の。命。を。求。め。
 殊。更。河。童。の。水。中。の。鬼。畜。を。紀。水。害。を。道。得。の。理。あ。
 ん。や。夫。の。原。の。水。利。所。以。縮。積。の。頓
 首。君。侍。此。所。不。合。願。の。生。贖。を。此。の。他。の。供。物。と。以。て

出まふ更なる入民つしけり致さるん。清麻呂ら點首日か可做
 やうとるべし。此祀あふ必あふあつちし。あし事人より告ぐし制
 す。五七日のち縮積明しつし。明後日河伯祀あぶしつし。
 其支度となすし。聞る。願ふや女と助て入。清麻呂を日時し
 つし。二人の家僕を先出し。その方の義堂と深くと着く。田夫の
 姿と奔立紀の場所つしつし。川淵の上壇を築る。四方より
 竹を立其前。仮家と造る。正面の中央より六十歳がりの老巫女
 左右より年若巫女十人連坐せり。下座より所の庄官あび古
 老の鞆麻上下を列膝し。邊より竹垣結あつち。元用の人を入
 ず。たはるの祀をんし。所の男女老若といはず。見物群集し。嗟呼
 不便なる。何某の女巫女老婆の籤考し。惜づき美人と殺す。左を
 へ父母の哀別離苦あひひやとて悲しとて。雜口小旬折し。孤の
 辛櫃小生贅と入。蓋を固め注連きりかめ。白張と着り。夫後の百
 姓最重氣小昇來ま。浪波や美人の生葬れ。ちりごと。知死期を走れ
 つし。流石心な。田夫野人も各水鼻汁を啜上げ。涙を流る。母
 り。若く巫女群。かの櫃と壇上より昇上げ。原の坐し。復し居直ま。

老巫女ま。祝詞をさ入。拍手し。老巫女あひ十頁の巫
 女。各袖と捲上。既。櫃を昇あげ。川淵より。投沈ん。守
 此と。群見の貴賤異口同音。阿弥陀佛と唱。折柄。義堂あぎ
 捨て清麻呂。城戸と明。を突と入。這哉々々老巫女。つし。俣
 汝小問つ。子細あつち。声あ呼。庄官古老。驚。つし。人
 ま。別人が。清麻呂。誰。外。者。も。な。く。僅。く。動。静。を。伺。入

巫女の回首清麻呂と云く。一發驚顔色なま。押入の都て法と犯
 遙く當國と謫居し罪人不浄を除くこの場ふ乱入り非礼なる。
 風く柵外へ退け。敢時つとと遠く。巫女と叱く。樞と沈めし。
 清麻呂突と壇上へ昇りて老巫女が皺腕下と拿り忽五膝瘦ぐ。
 猫小嗤も鼠の如く身自由く小為得るわ花奢優美なる清
 麻呂が風姿小似気なき武備の如く。見人更小恐嘆。若巫女
 大小怖と頭と撞る者もなき。左右小伏く汗と流す。清麻呂老巫女が
 手と突放て。覺えず壇下へ轉び落る。いも疲や止らる。この
 ま倒れ起も上らず。眼づり働くのこなり。清麻呂徐々壇下へ
 下り。老巫女と引起し。いも賊婦汝年々愚民と惑。數千貫
 の孔目と掠り人非人工の次升と明白小申せ。尤も人即刻り。

命を斬ん老巫女の指もいう。汝流人の身なるゆ當國の法式と
 知す。注古より水難を除する大典の神夏その生贄と妨る。この
 神勢も主女と苦め。奸計なり何と以てや。可着く神の
 答も。汝も懸く水屑となん。清麻呂微笑。更小社官と申し。い
 其許かの辛櫃の蓋と開き。生贄の少女と連束も老巫女声かけ
 喃庄官主。まかの櫃を披き。神罰らしらる。とて。音々
 張水押し。一村海もなると。いも庄官も恐る。いもつと
 躊躇。清麻呂の後と頷く。指積やあ。呼る。是よはと群見
 のら。最嬉氣小立出。庄官も迷と解す。妖言と信し。と
 夏と果す。汝風く樞を披も。承る。いも壇上へ昇りて固免
 蓋と無体小毀明。豈計らんや人あ。手頃石五ツ七ツ

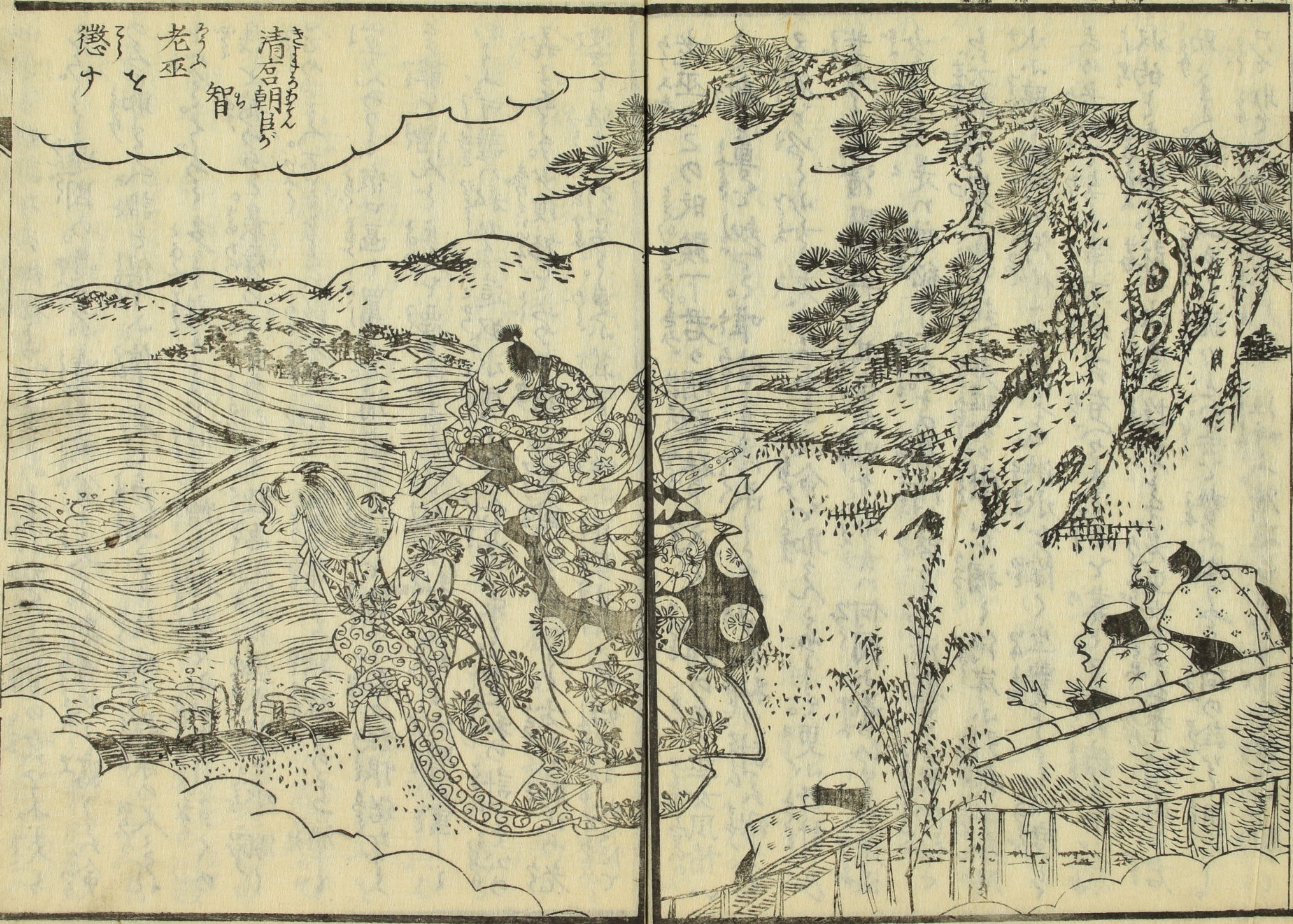
重入る。稻積心裡不明容を感嘆。彼石と壇下、投下し、の
 仲川の河童を石と抱き、嫁する。去る。堅く契み、笑へ
 莊官、め敷多の見客、惚々、あき、中々、言を出す者もあ
 清麻呂老婆と吃度。いふ賊婦、いふ、聞け。抑此、祀り
 多る。殊、一、天理、小、叶、天、地、遠、く、満、ち、と、入、り、理、
 於、二、つ、あ、ん、や、ま、い、つ、で、正、道、と、ん、子、細、あ、る、と、り、い、
 家、僕、も、ま、い、げ、潜、す、群、集、紛、も、動、静、と、窺、う、昇、来、
 櫃、の、重、気、な、ま、い、い、ふ、人、の、的、を、い、は、空、櫃、な、る、と、い、
 去、る、小、汝、口、賢、く、唱、つ、祝、詞、の、文、と、字、一、天、四、海、の、御、主、天、皇、の
 御、自、天、照、太、神、奉、奉、る、御、行、と、い、い、も、知、り、唱、つ、い、れ、お、
 戲、と、笑、い、あ、い、は、い、く、奸、計、な、る、事、明、く、い、は、此、上、も、陳、ず、り、や、

老巫女この取頭下。君の明察、終入る。祝詞の文、巫女風情、
 を斯く尊と知る。唯昔より傳承する所と。私の計、い、
 又石を以て少女と交ふ。あま、人命と助え、あ、い、て、更、小、奸、計、乃
 業なき。清麻呂再々。其命と助く少女へ何国小養ひ、や、老巫
 女、い、は、是、の、神、秘、と、て、必、その、居、所、に、落、ち、清、麻、呂、合、點、神、秘、と
 不、敢、問、と、突、と、身、を、起、老、巫、女、が、襟、元、を、搦、河、岸、小、引、提、半、身、河
 水、小、臨、如、何、小、河、伯、い、ふ、安、も、洪、水、を、除、く、生、贖、と、い、
 去、の、老、女、と、い、ふ、事、不、足、あ、有、と、い、と、石、を、妻、と、見、い、
 収、的、と、い、声、激、い、既、小、水、底、に、投、見、と、い、老、巫、女、の、声、を、奉、清、麻、呂、君
 助、と、い、原、より、此、糸、の、詭、な、と、い、妻、を、贖、不、做、と、い、何、の、詮、を、用、
 口、助、と、い、玉、と、い、大、声、と、い、泣、叫、い、清、麻、呂、な、や、手、を、宥、め、ず、怒、て

清右朝具
老巫
懲

本朝錦繡談卷三

七



本朝錦繡談卷三

十九

此祭も奸計なる神祕としてともあまじ。左の女は贊の女は夫を
さへ遠國の遊里に賣り黄金を交う。斯く白状を露する命
のみの助を誰を俣ふ位と。声振る泣喚く。群集の人これ
と哭も。さへ多幸謀るを暗も。憎む狸婆も小此年月多くの
浅を梅のらと最愛の子と匂引る。極悪無二の盗人婆々水濁り
若めも人。否々もこの飽不足面々ら集策も踏躑のら流す
宜んやうも。衆口區々罵ると清麻呂左右と頷く。谷が怨恨を
多罪と憎んぐ人と思さず。あまは些の私より。かゝ大膽の事
も。可護の私なり。這奴水屑も人易く下す。こそ私の計を公の
義もあらず。少復怒を止め。馳く腹愈も有べし。方を制止の老
婆と泣上小引居る。更ふ莊官を呼ぶ。莊官某のこの始末。忙し忙し

我も忘るるが。此時に々匂引る。頓首す。清麻呂も老実を察し
久も。衆人の疑しを晴んぬ。態と言葉を励む。其許一邑の
締結をゆる任。如斯奸計をして知や。莊官大お怒り。いま奸曲
とあるべき。古来の流例と違ふ。不便なる事と思ひ。祭をせん
水災あり。一村の人民小害あり。更もまゝ一人と沈む。寧ろ夫と
救んぬ。己が愚なる心より。狸婆も小魅も取り。引を荒縄にて。
老巫女を厳しく縛り。清麻呂下知り祭壇を毀め。此奴の
まゝ国守小引行。一伍一付を申展る。刑罰の守の随意扱この川瀬
と孰視す。水利を宜くかす。願ふ枝流を撃く。後の患を除くべし。
そ昔つそかの老婆が。兼り積る浅をり。夫錢をば事足せん
去の支ともよ申せし。巨細く教へ。莊官と国司も祈る。其日ハ

鼓小鼓らるる。村民等遠く送る。多年縣の困苦を一時小解除
りし。尊と拜謝し。神のこゝ小救し。

懲戒老巫得孝子

復話。あの老巫り。四国小住。邪業をけし。所と追遣し。と
と。より。當国。來り。巫女と号。辛日。霖雨の折。と。河伯
を巧。金銭を貪。改。今年も五月。雨降。つ。ま。
時間。得。河伯と祭。村中の軒。貧。福。
順。多分の贅料。會。叔當村。小神慮。令。女。隣
國。亦。家。出。五七日。経。飲。辛。と。贅。と
得。披露。祭。の設。と。干。當村。甚。右。門。と。
下。百姓。あり。老夫婦。の中。一。女。富子。と。号。年。二。九。の。春。を。向

ふ。志。右。門。へ。三。年。已。來。痴。痛。困。一。步。も。運。と。り。得。ず
して。打。叩。ら。る。元。來。家。貧。ま。上。農。作。も。為。得。ず。追。日。も。負
と。増。既。朝。夕。の。煙。も。絶。な。ん。と。す。彼。富。子。天。の。け。る。美。質。小
あ。も。孝。心。ふ。我。身。と。以。人。雇。と。も。薪。水。の。旁。と。お。聊。こ
五。足。十。疋。の。孔。方。と。り。い。兩。親。と。養。育。ふ。或。日。か。の。老。巫。富。女。い
と。小。招。其。許。と。四。五。日。雇。と。き。業。あ。る。と。と。兩。親。へ。元。より。他。人。よ
も。必。語。ず。我。方。小。居。る。此。い。河。伯。祭。了。と。ん。直。と。飲。え
其。と。ふ。孔。方。五。貫。文。と。ふ。と。と。泄。富。女。へ。兩。親。を。豊。く。り。
養。と。ん。直。と。の。こ。一。番。う。孔。方。許。多。と。得。ん。が。嬉。と。ふ。こ。と。を。信。入。
老。巫。と。ら。び。一。室。入。四。方。と。扱。り。堅。く。出。入。と。な。せ。せ。せ。
と。ふ。こ。と。の。飯。と。ふ。の。富。子。へ。由。縁。あ。ず。父。母。の。た。と。せ。

我と俟りて去ど祭もつゝいふ。五貫文の孔方を餓く辱くを告ぐる罪と謝せんもの心づくも今日と傳居る小思ひもよき聞くる四面の板をいど荒くふ打破て。屈強の捕卒突と入る。富子引く出んとす。富子驚きこぼる。何方へ行くにせらるや。巫老女雇を免る。他へ出さかえん。捕卒等微笑して。聊恐縮とあつて。先官ふ出て。国司の仰を承る。直事官所に至る。老巫の左右の手と押屈く。縄目喰入る。小禁あつて。富子怖と悲ふ。国司のよふ注伏の国司声と和け。勿尤忍汝りの老巫女のかゝる。何がなやあやと富女いひき教とよ。先の始末を隈なく申述べ。国司も良感心。悪く其方の親孝と及及び。金孝の心より。かの老巫と計り。まゝなり。さふ先約を達す。青銅五貫文とつり。金余褒美とて

白銀二十枚とつり。富女の夢の心地と有る。海もよき。国司の村主小命。父母の元来。此孝女とて由流る。く。富女と被物。り。甚右門。老巫女の数羊の積。巨細。小孔。用。終。死罪。を。名。本。家具。資財。官。運。あ。五七日とす。後。在。官。古。老。了。勇。仲。川。の。水。利。乃。件。と。君。が。命。と。受。て。国。の。守。乃。命。と。受。ま。かの。老。婆。貯。る。金。銭。を。數。費。用。小。賜。へ。が。人。民。の。窮。更。が。希。一。時。も。早。く。流。を。令。水。害。を。除。ん。事。と。清。麻。呂。大。小。喜。悦。す。則。川。の。原。流。を。上。檢。つ。昔。面。を。与。つ。農。民。上。下。數。十。流。の。溝。を。堀。或。分。流。或。合。流。也。田。圃。の。便。利。を。專。じ。未。流。を。大。洋。落。入。霖。雨。急。雨。水。災。なく。耕

作^しカ^と脚^め。又^も川^端數^百町^と平^均。新^田開^発。負^民。
 領^与へ^風。農^事と^研せ^らふ。年^に洪^水な^らば。盛^夏。
 水^潤澤^々。民^の欲^勞。新^田豊^饒。負^外。數^斛と^得
 て自^ら。一^村富^有せ^らふ。と^傳承^と。近^郡遠^縣。清
 麻^呂と^請招^く。早^水も^難田^小。利^あら^ん。望^と。
 地^理と^考へ^溝壑^と。或^は平^け高^を。低^と埋^め。
 修^造な^らば。水^旱の^患。利^益と^得。大^{あり}。
 一^國人^民。若^名。溢^ま。

本朝綿綿淡卷三

